

## 仕事始め その6

昨日の続きです。

——文科省の対応に問題はなかったのか。批判に対してもほとんど反論をしていない。

鈴木氏：文科省の対応にも、問題は、おおありです。段取りが悪く、この1年の対応が鈍かったのは事実で、もっと早く調整の労を取るべきだったと思います。全高長との間で、「働き方改革も大事ですが、個々の教員の自主的な任意な協力は止めないでください」という説得と調整ができていなかった。大学との調整ももっと早く進め、何段階かにわけてもいいから、4技能を入試で使う大学名を、早め、早めに高校に公表すべきでした。この点は、全高長が困るのもよく理解できます。

2018年には文科省の局長二人が収賄で逮捕される事件が起きたり、全高長の窓口を務めるべき局長の病欠が続いていたり、いろんなことが重なったことも影響したと思います。しっかりと何度でも説明すべきでした。ただ、反論すればするほど逆に叩かれるだけなので、貝になるしかなかったのも事実。

——英語の民間試験導入は5年先送りになり、記述式導入も延期が発表された。改革の先行きは不透明だ。

鈴木氏：入試改革が頓挫してしまったので、ますます、これまでの教育を墨守しつづける公立高校にしか通えない地方の生徒、経済的に恵まれない家庭の生徒と、様々な教育に触れられる都会の裕福な生徒との地域格差、経済格差が広がるでしょう。

慶應 SFC(湘南藤沢キャンパス)では、すでに一般入試で入学する学生は6割、AO入試(\*注)と内部進学が4割になっています。慶應の「すずかんゼミ」には学生が60人いますが、先日聞いてみたら、高校・大学で留学経験のある学生が8割にのぼりました。AOで慶應 SFCに入った学生は、入学段階で、ほとんどが英検で準一級レベル以上の英語力があるので、外国人の研究者を呼んで英語で授業をしてもらっても何の問題もない。センター入試のマニアックでトリッキーな試験の対策をせずすみ、高校3年間の間に留学したり、サマースクールに通ったりして生きた英語を学んでいる。それに触発されて、一般入試生も入学後、積極的に留学などしている。

【\*注：AO入試/アドミッションズ・オフィス入試。慶應大では「一定の資格基準を満たしていれば自分の意思で自由に出願できる推薦者不要の公募制入試」と定めている】

——ある程度裕福な家庭でないと留学なんてさせられない。

鈴木氏：結局はそこなんです。慶應 SFC 生は、起業も海外で働くのも当たり前。そういう世界がすでにあるわけですから、格差はどんどん広がります。島嶼部の高校生でも、貧しい家庭の高校生でも、公立高校に通って一生懸命勉強すれば、英語でコミュニケーションができるようになり、AI に置き換えられない人材になれる——そういう教育に変えたいと思って改革をしてきた。現に、福島のみたば未来学園などは、がんばって国連にまで行って学んでいる。しかし、現状を変えさせないように抵抗する人たちがいて、すべての改革を潰そうとする。

だからもう、全国規模の改革は諦めて、全国一律のセンター試験を廃止し、各大学が独自に入試を実施する方式にすればいいのではないかと思います。学習指導要領を大括り化し、センター試験をやめるという案がありました。これにも、全高長は反対。大学ごとの入試になれば生徒の個別指導をどうしていいかわからず不安だからではないでしょうか。とにかく現状からビター文変えさせないのです。

今回の改革がすべていいとは思いませんし、人間のやることだから完璧だとは思っていません。が、そこまで反対するのなら、20 年間、学習指導要領違反を放置してきたという事実をふまえたうえで、対案を示していただきたい。

現状で、学習指導要領に定めてある英語のコミュニケーションに関する授業をやっている高校は 3 割しかない。それについて、全高長は、実施率を 10 割に上げるための対案を示していただきたい。英語だけではなく。言語活動の充実という指導要領がありながら、その指導も十分に行えてこなかった。この機会をとらえて、高校教員の質と数を充実しようとしてきましたが、そのプランもこれで頓挫しました。入試を変えることで高校の教育を変えるというのは、本来は邪道なんです。しかし、現場からでは変えられないから、入試から変えるしかなくなったのです。

\* \* \*

高校は、全人教育を主眼として、学びの質を担保し、学びの魅力を発信していくことに重要な意味を見出してきた私たちは、生徒たちの今後の 50 年にも責任を取り、学校の魅力を継続し、時代の要求を取り入れながら、不易と流行をきちんと見つめていきたいと考えます。

磐城高校は、これからも生徒一人一人ときちんと向き合って、生徒のかけがいのない特質の伸長を目途に研鑽してまいります。